

多摩御陵（角光嘯堂）

短歌

木々の葉の匂い床しき御陵の

尊き丘に春風ぞ吹く

金風 爽やかに 渡る 御陵の 津り

天子の 御魂 玉扉に 鎮まる

自然の 風光 山川を 周らし

靈威 長しえに 存す 浅川の 辺

作者略歴 京都壬生の儒家に明治二十四年十二月十一日に生まれた。

九州小倉中学を経て九州大学国文科を卒業。漢学を大分日田の広瀬淡窓の塾で研究し、その後、二十二年間、日本大学国文学の教授を勤めた。全国朗吟文化協会初代会長、淡窓流宜園調宗家・家元で文学博士。

解説 爽やかな春風が吹く多摩御陵の風景を詠った詩。

語釈 ※床しき||上品で落ち着いた美しさがある。※東風||東から吹く風。こち。春風。※玉扉||美しく清楚な扉。※風光||自然の美しいながめ。景色。※靈威||不思議な威力。

通釈 爽やかな春風が吹く多摩御陵のほとりには歴代の天子の御魂が葬られており、その多摩御陵は自然の美しい景色が周らされ、そして、靈威がいつまでも続く浅川の辺に鎮座されている。